



特59

太閤記

947

№ 17466/27





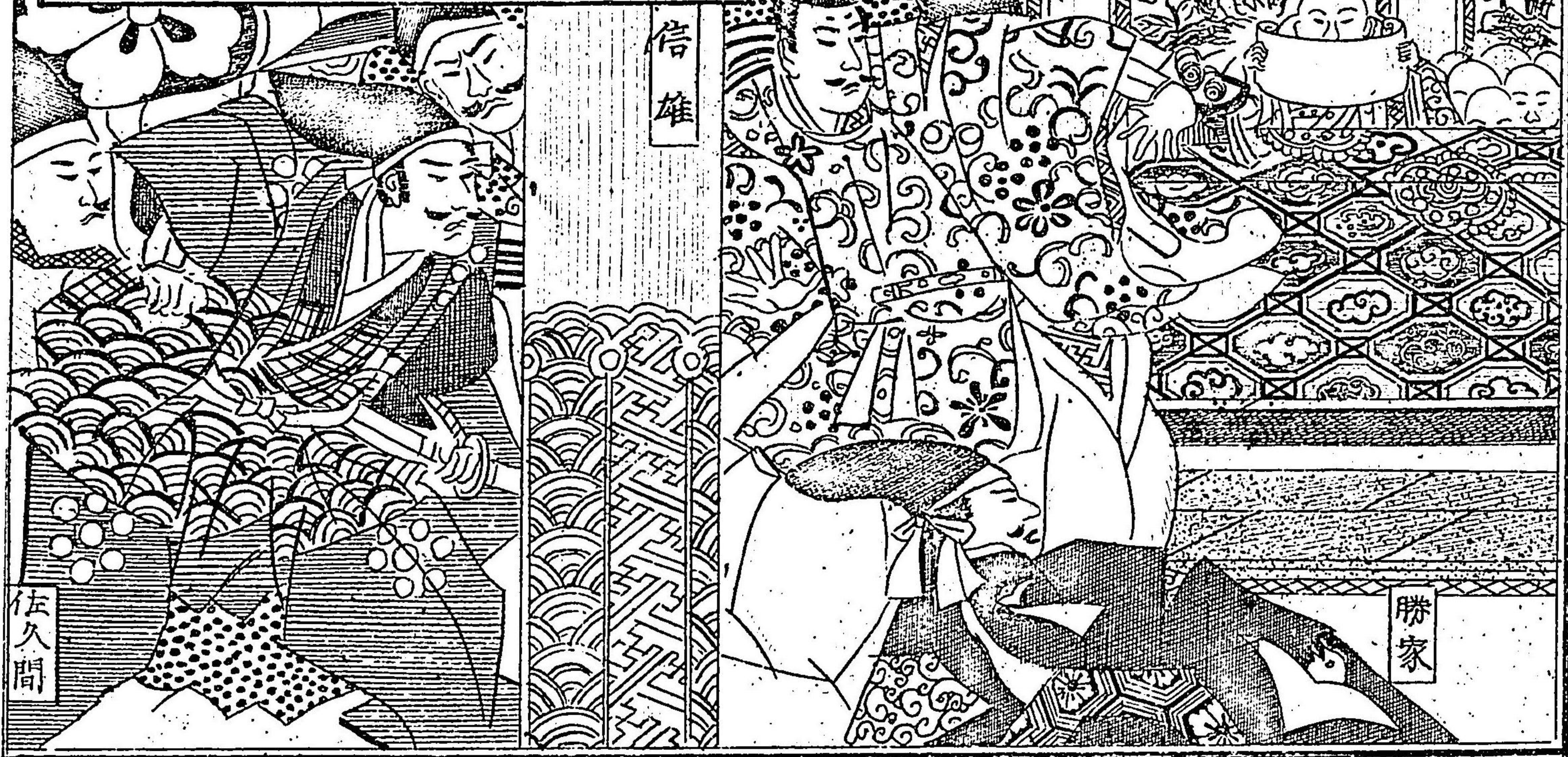
賤ヶ嶽の合戦は此
 国方の強勇佐久間
 玄蕃ハ秀吉は向ひ
 只一討はなきん大
 鉄棒打りし秀吉
 の一聲眼力恐れ給ふ



佐久間玄蕃



望二堂丞府
望二相





相及ひし
 の勢ひを
 今川家
 譜代たる
 松下之綱
 が若輩たり
 しりか
 稱変つば
 高名せんと
 主人之綱
 今川家
 譜代たる
 松下之綱
 が若輩たり
 しりか
 稱変つば
 高名せんと
 主人之綱

日向守
 日向守

見へさり
 つひに北條の先陣
 るる伊東日向
 守ハ戦ひつ
 むは負色
 とるり次
 引退き
 けり
 後陣ありしが
 獨りいよあんどし



藤吉
 天正十年
 の頃駿州城
 今川義元ハ北條
 康元ヲ討
 和起り
 終は拵

この軍の供
 たり明
 乱れた
 うひをげしく
 了らつて



信長

昔なれが
小兵の
核面
柳ん
谷の
郷を

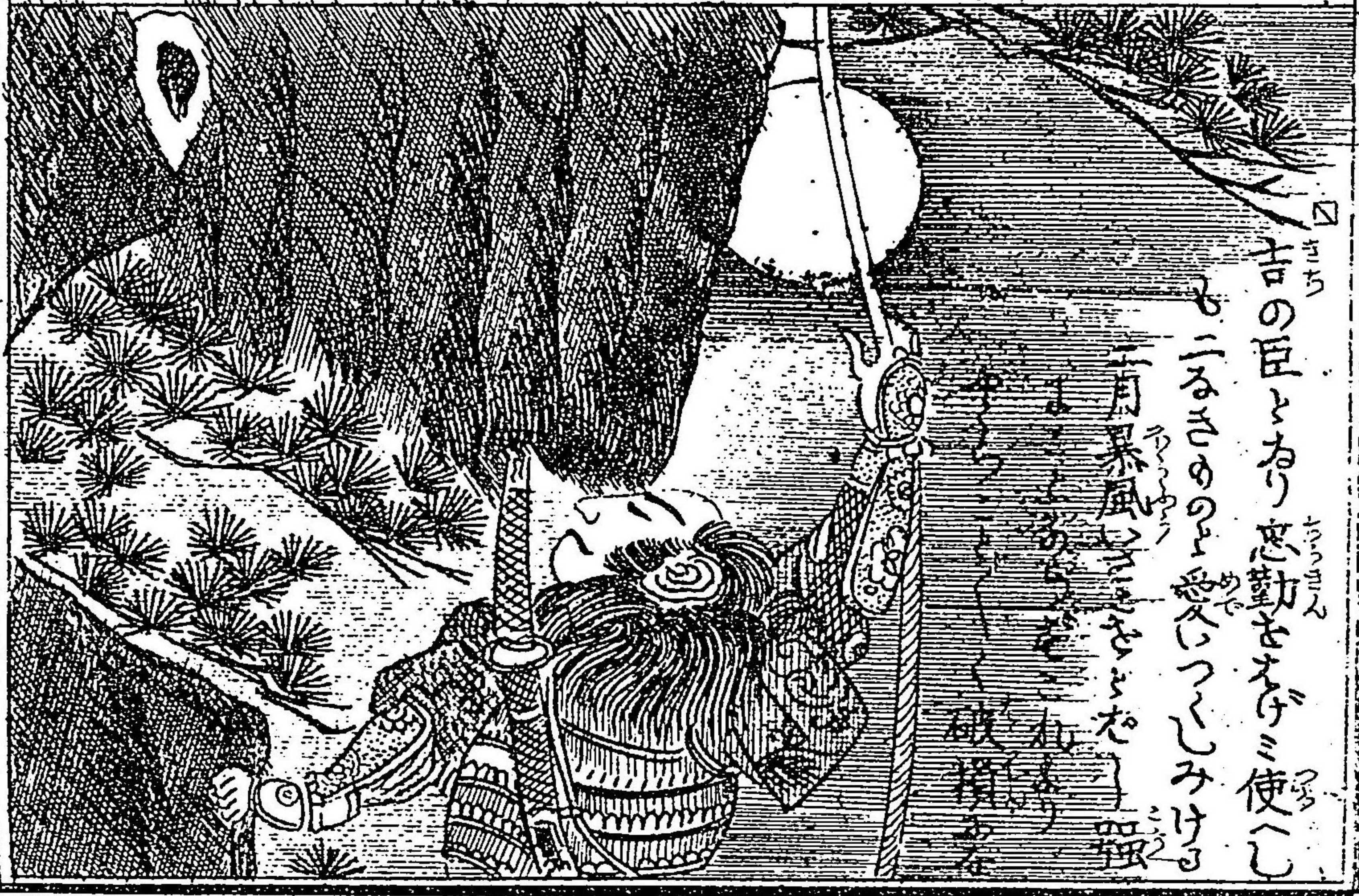


藤吉

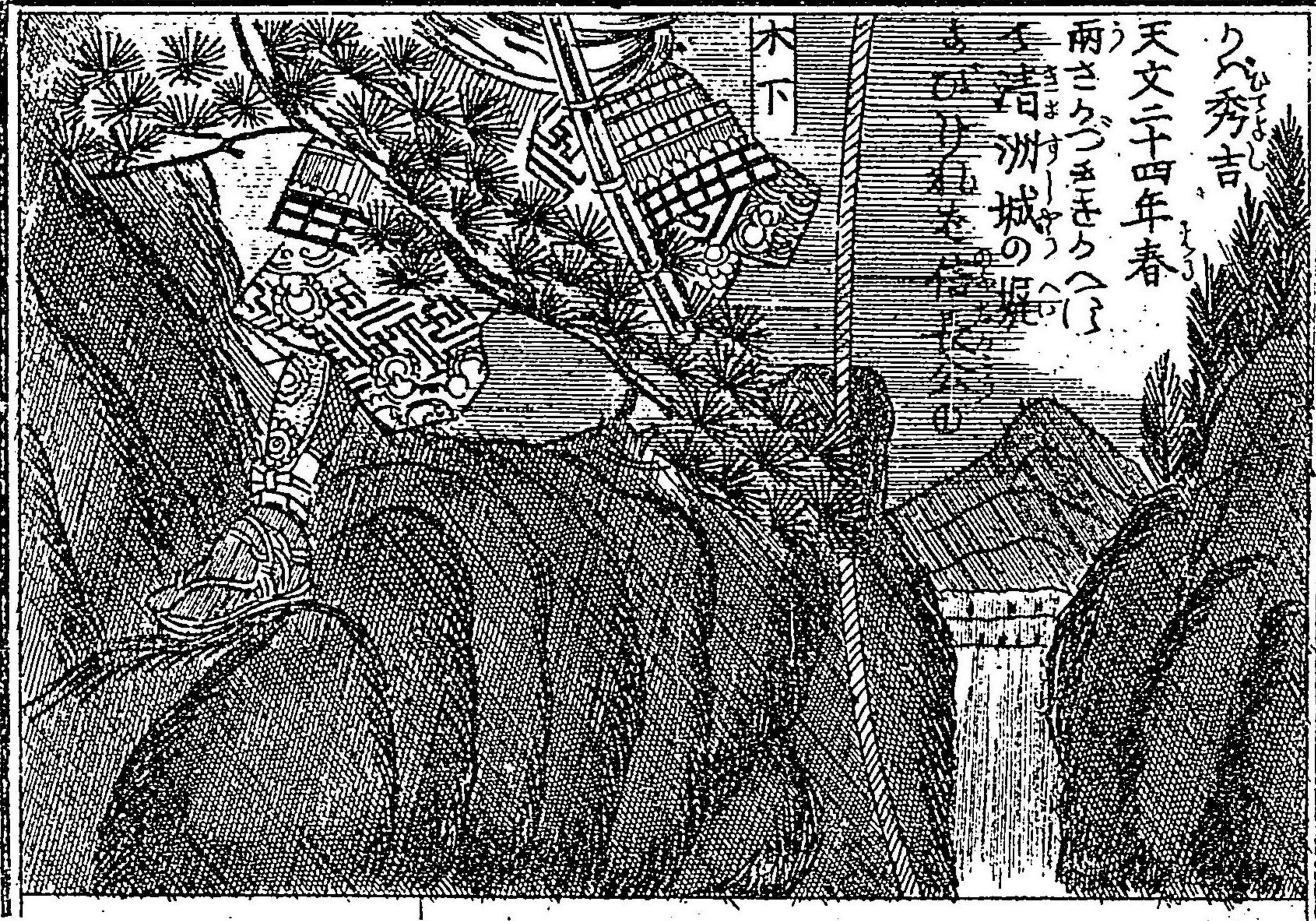
日向守の退き
不意お起りて討
けるに今川の大い
得たりと林板説尾州
城主織田信長ハ極平を引
狩らの幕張近一人の男子
ありて言葉
良鳥ハ木を撰んて下り
選ん仕ふあはれ良将と見奉
仕を需む見参申したまへ
ちやく奇んと此時從者
立駈ぐを信長公ハ小も駈

井古さ
眼さ
流





吉の巨となり忠勤をなす使へし
 二なるものを受つしみけり
 一月暴風をなすを強
 破損を



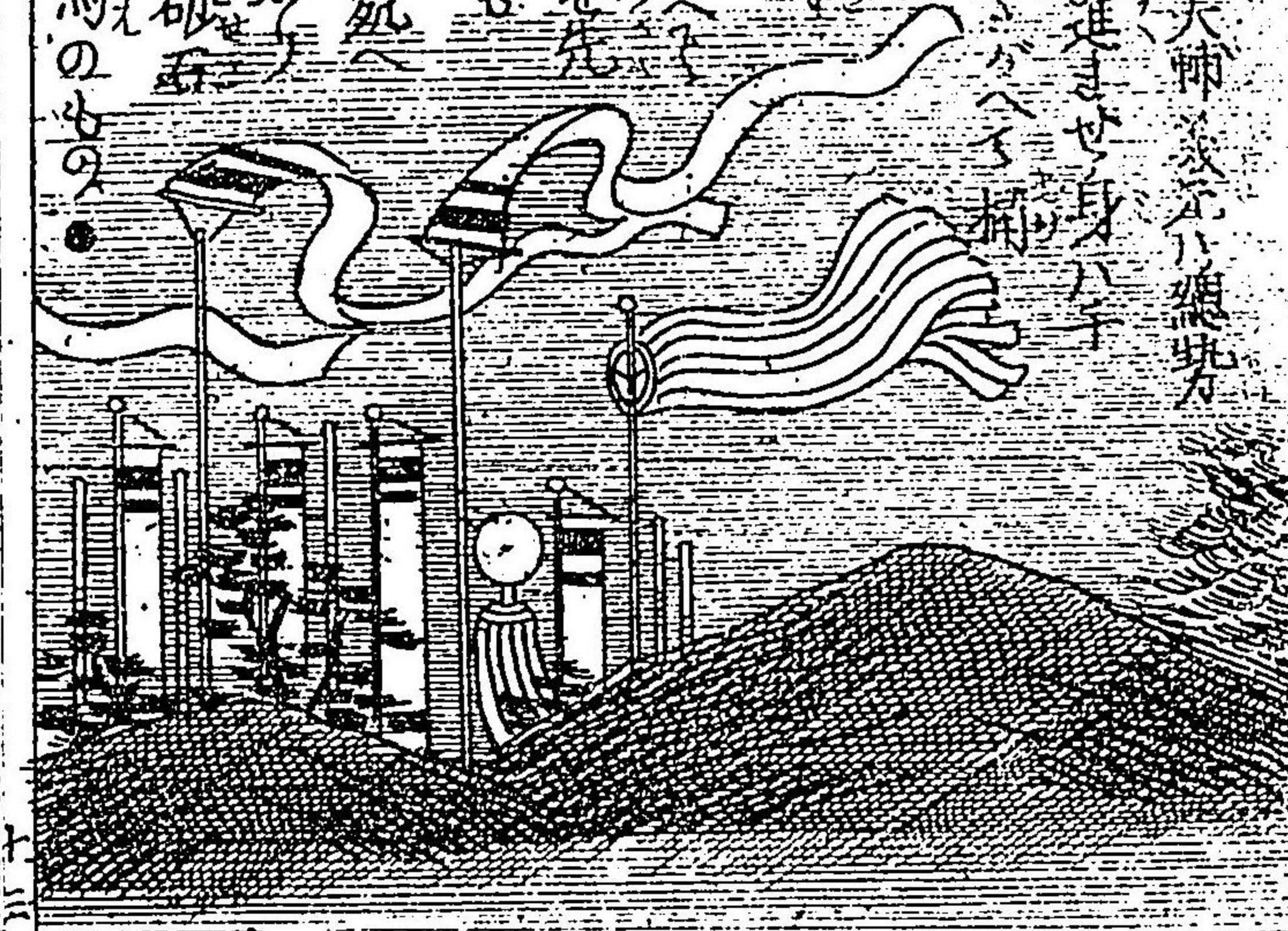
秀吉
 天文二十四年春
 両さくらまきくへし
 清洲城の堀
 木下



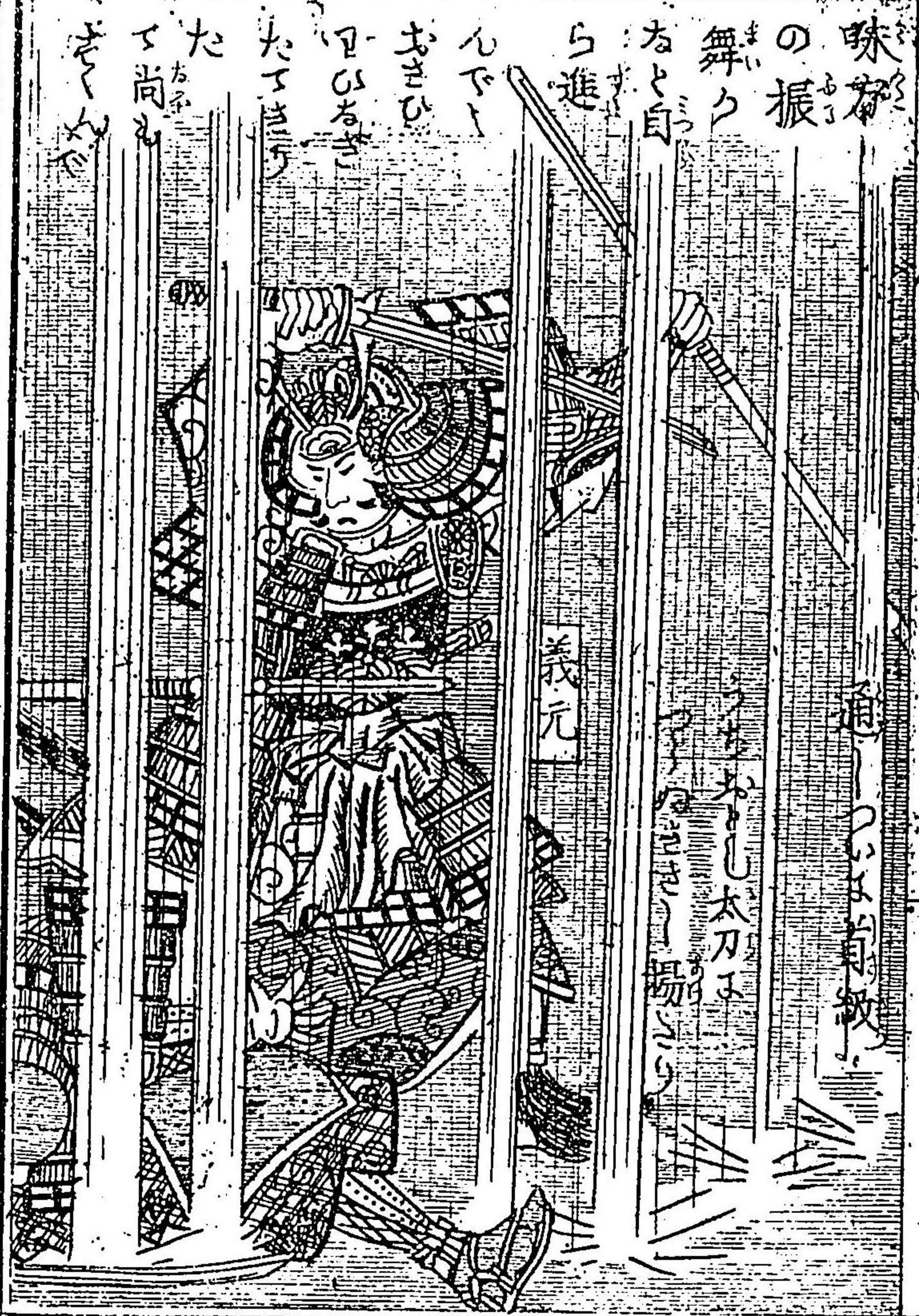




板今川部の大陣
 有餘人を志す
 信長前道まへへ
 木下藤吉を先
 急雨俄はあけ
 来り大雨破石
 を飛し入馬のもの



音はちよん向えは是
 熱田の神風と
 志きり日兵卒は下
 初めし退兵を
 五百余人義元の旗
 本へ無二無三切込ハ
 今川勢まどろま
 元是を刃てきたる



味方の

の振

舞

なと自

ら進

ん下

まきひ

ひひるき

たてきり

た

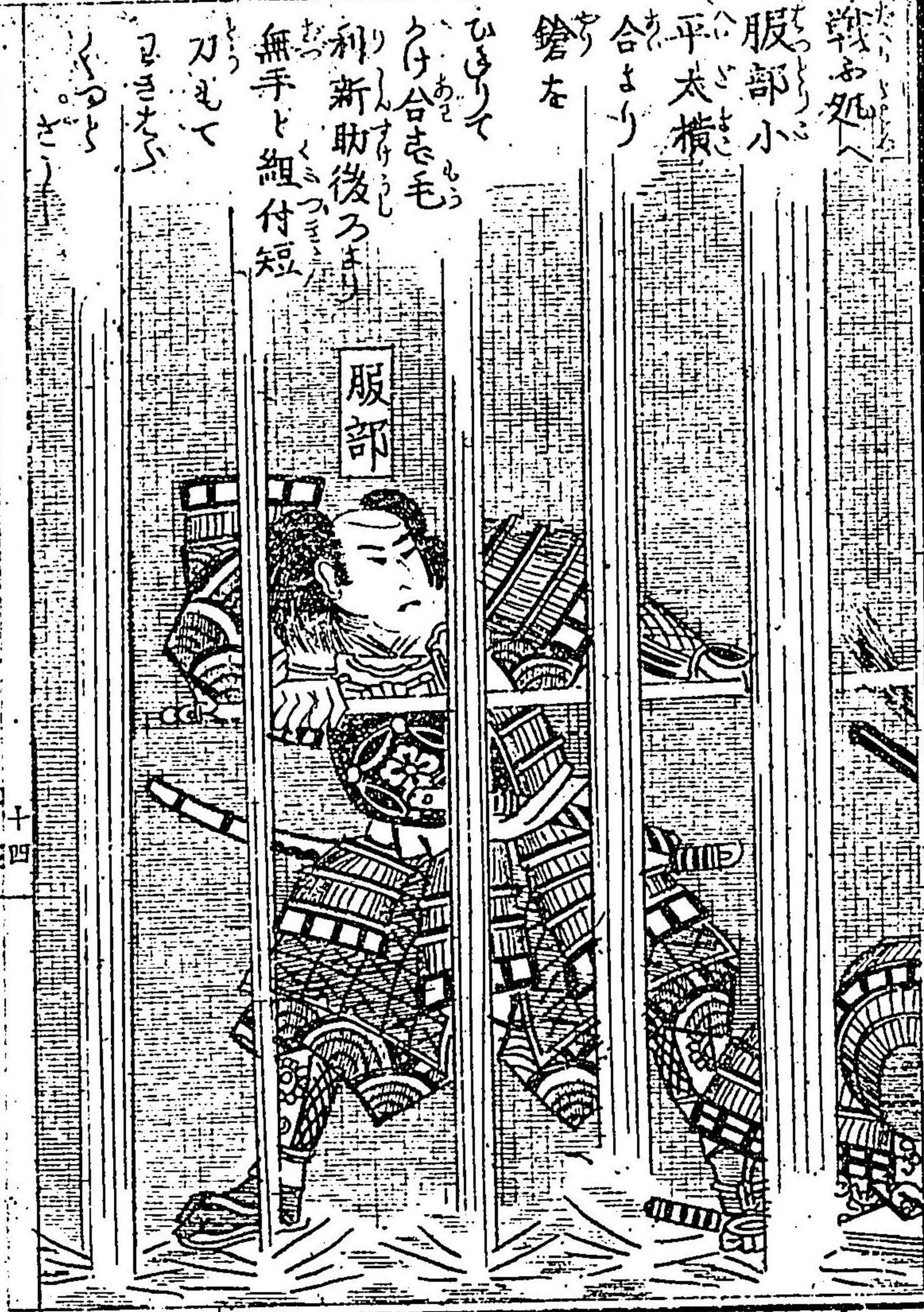
て尚

きん

通いしは前紋

おし太刀

義元



戦ふ処へ

服部小

平太横

合より

鎧を

ひきりて

くけ合志毛

利新助後ろ

無手と組付短

刀もて

目もたふ

くつと

さし

服部



野原ありけん木下藤
 吉が軍配は捕
 ぬぎまなす山
 間のおぐさの
 つゆと
 消へし



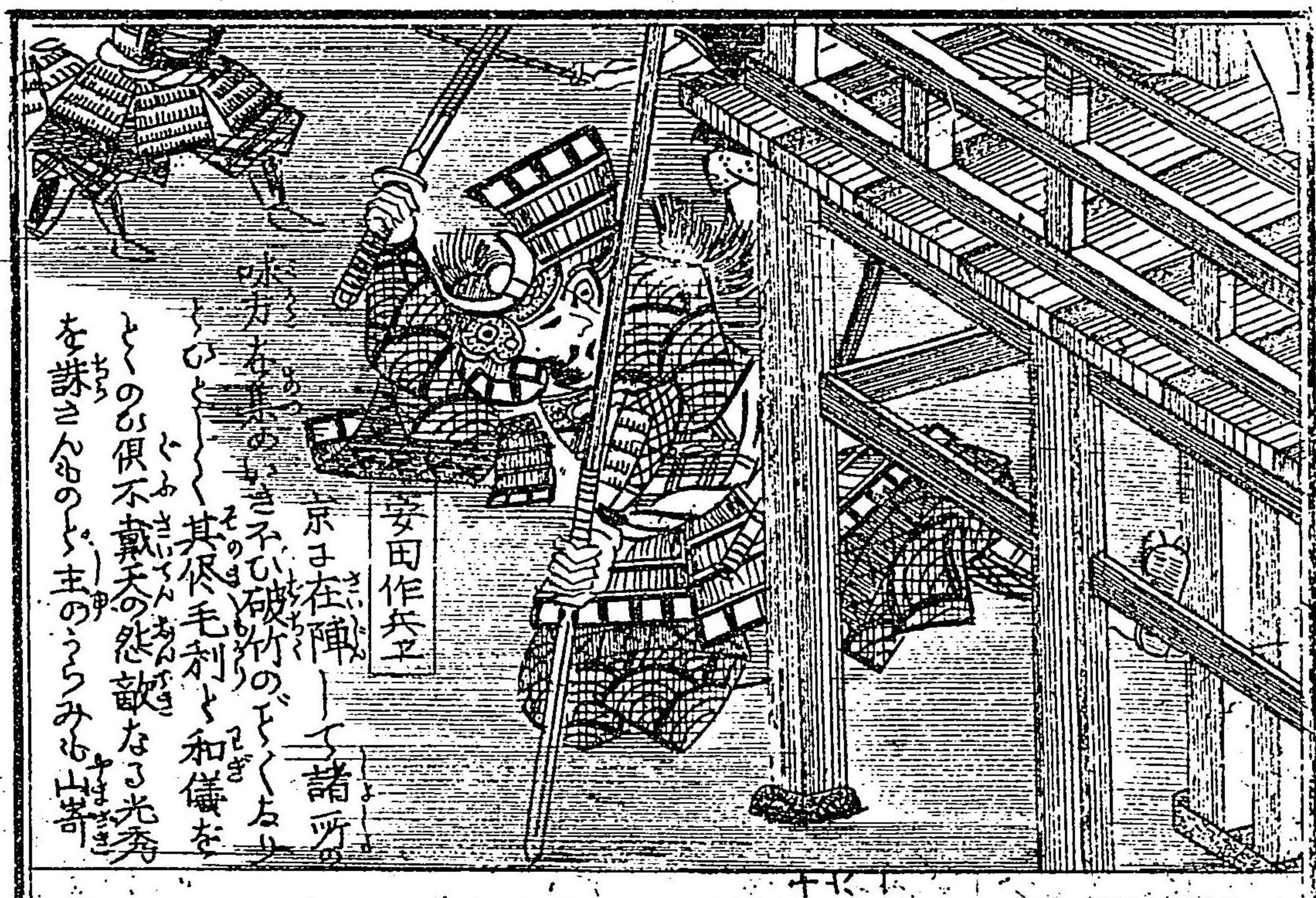
ころ運金ゆきす
 野原ありけん木下藤
 吉が軍配は捕
 ぬぎまなす山
 間のおぐさの
 つゆと
 消へし

卯月二日
 卯上刺明智の死やう左馬介秀俊
 一万人を引卒一丁本能寺をくりりりこにて辰巳の
 より火を放ちまつしくらな攻立けれ信長公ハ不意
 九犬は狼狽し上も下へ大騒動なりけり
 大正十年
 説頃



赤蘭丸
 大に戦ひけるが敵丸は
 終つて死したるは
 終つて死したるは
 終つて死したるは

本能寺は光秀の
 為に亡い給ひ
 より光秀は京都



安田作兵衛
 京は在陣して諸所
 其の不利と和儀を
 とくの恨不戴天の怨敵なる光秀
 を誅さんとの主のうらみも山崎





番せんぐな
 きのこころまく
 のうちは声あ
 りて焼香さ
 せん無用
 とお声さ
 らせり
 あげり幕
 の内は少将
 秀吉の切主
 をいそいで威風
 凛々としてあ
 なたをひらき
 びすりとく
 び入ればき
 び
 十九



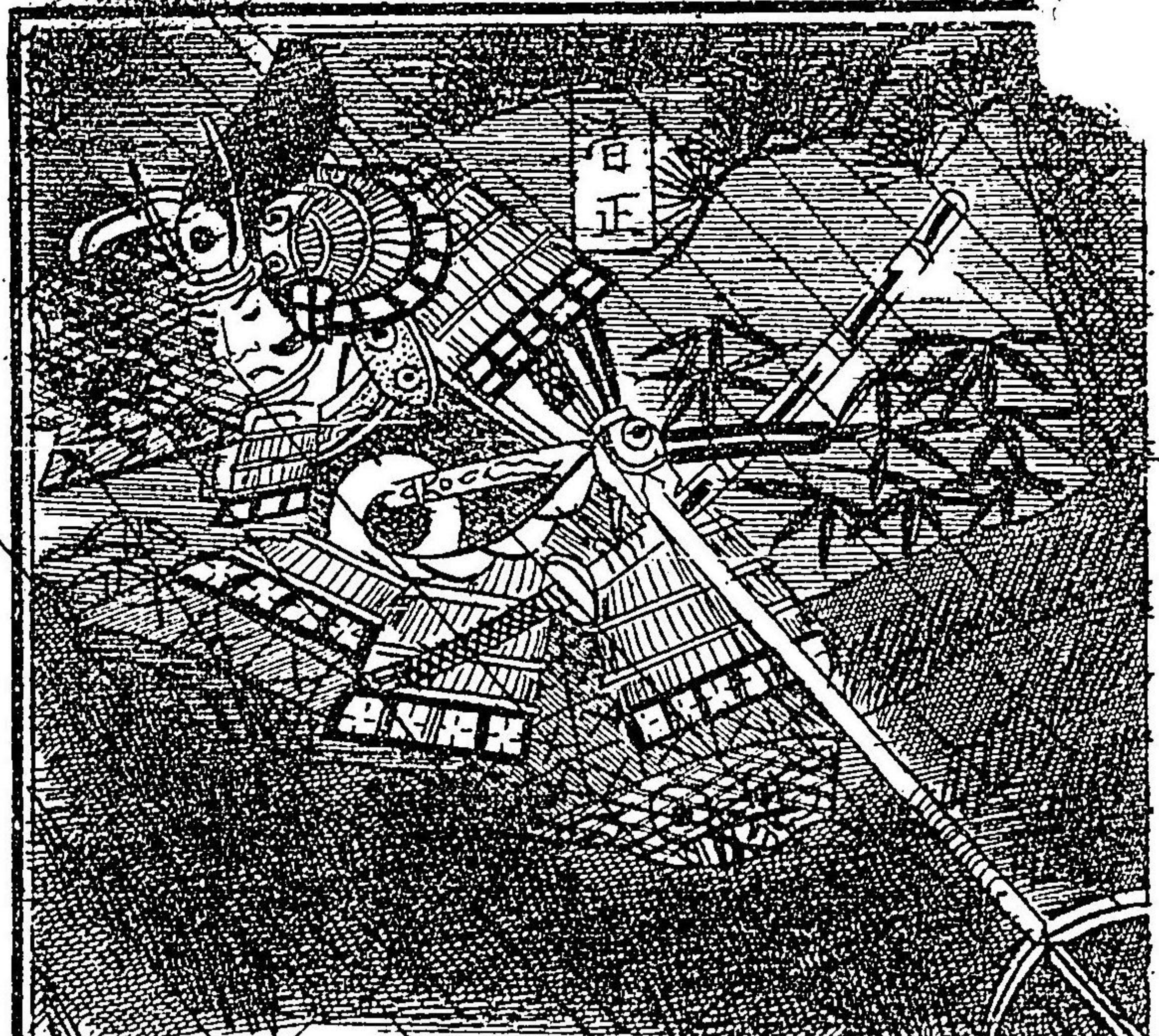
亦名先主信長公の
 願骨を大徳寺に
 祀らんとして参集て
 儀式の常ならず
 此時信雄信高勝家
 の言葉まで一番は焼



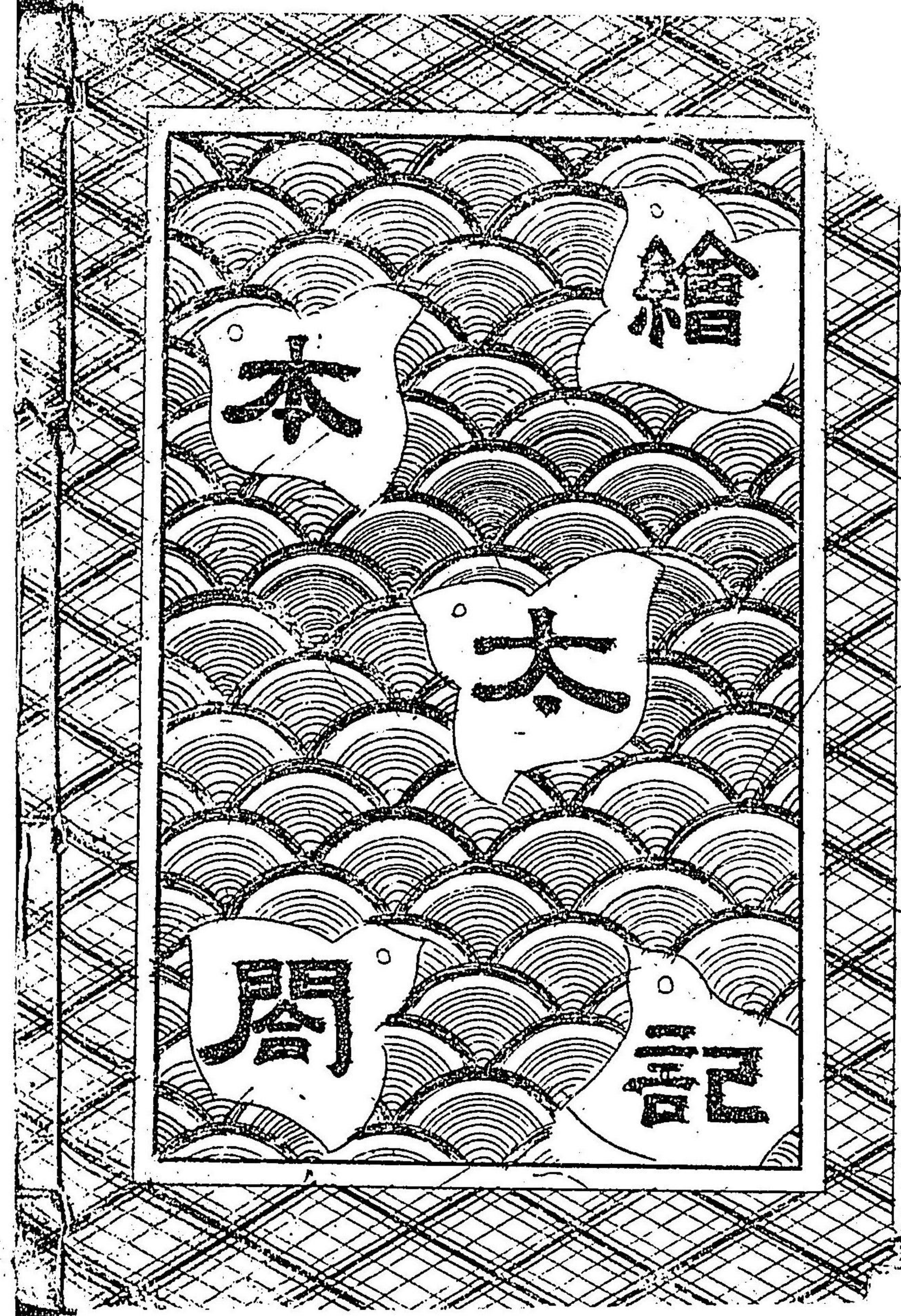




明治廿二年五月廿五日 印刷
 明治廿二年五月廿五日 出版
 編者 大坂南区船場西ノ十番地平民
 松田植五郎
 大坂南区玉屋町十五番地平民
 田中五郎



正
 伏見城下秀吉公の
 秋殿下秀吉公の
 前代未聞の地
 農の時桃山の園を藝
 居せし加藤拜謁るし
 其赤心を御感あり御す
 ことなりけるおまはる
 御代の太平の壽を取
 樂の菊は万歳不朽の
 よろこびを民百姓も



繪

木

大

閣

記